

(六) 幕末の姫路

異国船の来航 江戸時代の終わりが、日本の近海に出没する外国船を黒船と呼びましたが、蒸気船と帆走船で、横腹からいくつかの大砲をつき出していました。

幕府は、海岸に砲台や土塁を築いて、警備を厳重にするよう呼びかけ、姫路藩でも室津や家島に早急に砲台を築きました。続いて、飾磨津・福泊・高砂・古宮にも台場を設けました。特に、飾磨津は姫路に近く大事なところなので、

大砲四門を備えました。当時射撃練習は、網干の沖に旗を立てて、これを目標にしたそうです。室津・飾磨津などの砲台の信号には花火を用いたようです。

一八五四年（安政元年）、神奈川（横浜）で日米和親条約が結ばれた直後、ロシアのプチャーチンが軍艦をひきいて大坂湾に入り、天保山沖にやって来ました。民衆が騒ぎたてたので、大坂城代は、諸藩に持ち場を定め、海辺の警備にあたらせました。

このとき、姫路藩も大阪へ出兵するとともに、室津・家島・高砂など沿岸の警備を嚴重にしましたが、ロシア船が半月後に下田に去り、幕府と和親条約を結んだので、姫路の人々は、戦争にならずほっとしました。

姫路藩の態度　酒井家は、譜代大名の中でも名門で、しかも徳川將軍家の親戚関係もあり、藩主忠績は、江戸幕府最後の大老にもなった家柄ですから、姫路藩は佐幕派でした。しかし、藩の中には天皇を尊び外国船を打ちはらうと

いう尊王攘夷を唱え、天皇の政治に改めようと考える者も多く、河合宗元・宗貞の父子や江坂行正・松下綱光など、たくさんの勤王の志士もいました。彼らは計画がもれたために、その目的を達しないままにとらえられ、死罪や永牢に処せられました。これを、姫路藩甲子の獄といいます。現在、勤王の志士たちが処刑された場所を示す記念碑が、大蔵前町の児童公園に建てられています。

一八六八年（明治元年）一月六日、鳥羽・伏見の戦いに、姫路藩は旗本や会津藩・桑名藩などとともに徳川方につき、薩摩・長門の新政府軍と戦いました。完敗しました。十一日に、徳川方に味方した諸藩を討つ命令が、新政府から出され、十二日には、備前（岡山）藩の兵が姫路へおし寄せました。

藩主忠惇は、鳥羽・伏見の敗戦の後、將軍慶喜に従って大坂から軍艦開陽で江戸に行つて不在でしたので、姫路藩の重臣たちは会議をし、人質を出して城を明け渡すことを申し出ました。備前藩は、このようにあっさりした開城では、

長門藩がなつとくしないだろうと考え、十六日に姫路城西方の景福寺山と男山から、大砲を二、三発ずつ、空砲くうほうもまぜて発射しました。このため福中門（旧備前門）の屋根瓦が飛び散り、城内へも砲弾ほうだんが落ちました。藩士の中には、あくまでも備前藩と戦うことを主張する者もいました。しかし家老たちが降伏こうふくを申し出て、その日のうちに藩士たちは城外へ立ち去り、城を明け渡しました。

姫路藩は、天下の形勢を察さつし、新政府軍と一戦を交えることはしませんでした。それは、城下を兵火にまきこみ、領民を苦しみにさらすことをさけるためで、つつしんで朝廷に服従ふくじゆうする決断をしたのでした。これは新しい時代を考えた適切な処置しよちであったといえましよう。

姫路城歴代の城主

(注)

秀吉以前の築城については『姫路市史』第十四巻第一章第一節で異論が出されている。

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	代
〃 孝高	〃 職隆	黒田重隆	八代道慶	〃 則職	〃 政隆	小寺豊職	赤松政則	山名持豊	〃 職治	〃 景重	〃 景治	小寺頼季	赤松貞範	城主名
よしたか	もとたか	しげたか	みちよし	のりもと	まさたか	とよもと	まさのり	もちとよ	もとはる	かげしげ	かげはる	よりすえ	さだのり	なまえ
一五六七	一五六四	一五四五	一五三一	一五一九	一四九一	一四七〇	一四六七	一四四一	一四〇三	一三五八	一三五二	一三四九	一三四六年	城主になった年
〃 一〇年	永禄七年	天文一四年	享禄四年	永正一六年	延徳三年	文明二年	応仁一年	嘉吉一年	応永一〇年	延文三年	文和一年	〃 五年	貞和二年	
27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	代	
〃 直矩	〃 直基	〃 忠弘	松平忠明	〃 政勝	〃 政朝	本多忠政	〃 光政	〃 利隆	池田輝政	木下家定	〃 秀長	羽柴秀吉	城主名	
なおのり	なおもと	ただひろ	ただあき	まさかつ	まさとも	ただまさ	みつまさ	としたか	てるまさ	いえさだ	ひでなが	ひでよし	なまえ	
一六四八	一六四八	一六四四	一六三九	一六三九	一六三一	一六一七	一六一六	一六一三	一六〇〇	一五八五	一五八三	一五八〇年	城主になった年	
〃 一年	慶安一年	天保一年	〃 一六年	〃 一六年	寛永八年	〃 三年	元和二年	〃 一八年	慶長五年	〃 一三年	〃 一一年	天正八年		

43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	代
〃 忠学	〃 忠実	〃 忠道	〃 忠以	酒井忠恭	〃 朝矩	松平明矩	〃 政永	〃 政岑	〃 政祐	榊原政邦	〃 忠孝	本多忠国	松平直矩	〃 政房	榊原忠次	城主名
ただのり	ただみつ	ただひろ	たださね	ただすみ	ともりのり	あきのり	まさなが	まさみね	まさすけ	まさくに	ただたか	ただくに	なおのり	まさふさ	ただつぐ	なまえ
一八三五	一八一四	一七九〇	一七七二	一七四九	一七四八	一七四一	一七四一	一七三一	一七二六	一七〇四	一七〇四	一六八二	一六六七	一六六五	一六四九年	城主になった年
天保六年	文化二年	寛政二年	安永一年	〃二年	寛延一年	〃一年	寛保一年	〃一七年	享保二年	〃一年	宝永一年	天和二年	〃七年	寛文五年	慶安二年	

48	47	46	45	44	代
〃 忠邦	〃 忠惇	〃 忠績	〃 忠顕	酒井忠宝	城主名
ただくに	ただとう	ただしげ	ただてる	ただとみ	なまえ
一八六八	一八六七	一八六〇	一八五三	一八四四年	城主になった年
明治一年	慶応三年	万延一年	嘉永六年	弘化一年	

昭和二七年橋本政次著「姫路城史」上巻
「姫路城年表」より作成